

学生の授業満足度から見た授業形態と内容のあり方について

～教職スタート科目「教職概論」の授業改善に向けて～

霜川 正幸・村上 清文・岸本憲一良・佐々木 司・鷹岡 亮
高橋 雅子・中村 哲夫・西岡 尚・長谷川 裕

Lesson Types and Contents Based on the Satisfaction Level of the Freshman Students
– For the improvement of freshmen seminar lesson plans ; Introduction to the Teaching Profession –

SHIMOKAWA Masayuki, MURAKAMI Kiyofumi, KISHIMOTO Kenichiro, SASAKI Tsukasa,
TAKAOKA Ryo, TAKAHASHI Masako, NAKAMURA Tetsuo,
NISHIOKA Takashi, HASEGAWA Yutaka

(Received January 11, 2011)

キーワード：「教職概論」、授業による変化、自己評価、授業改善

はじめに

筆者らは、前稿「教育学部入学生の教職キャリアに対する意識の違いについて」において、学生や学生集団の教職やキャリア形成に関する動機、意識、意欲や態度等には、入学当初から「違い」が有ることを示し、その「違い」の様子について整理した。

そこで、本稿では、それらの「違い」により「教職概論」における学習の成果や成長の実感がどう違うのか、どのような変化をもたらすのかを解明することをおして、「教職概論」における授業改善につないでいきたい。

本稿では、平成22年度「教職概論」で実施した「アンケート（一部）」結果を用いて論を進めることとする。

1. 調査の対象、目的や方法等

1 「教職概論アンケート」

時期：平成22年度「教職概論」第1コマ目(授業開始前)と第15コマ目(授業終了後)

対象：平成22年度「教職概論」受講者

方法：調査紙による

回答：回収数を合計、集計・整理区分により示す（表1）

表1 「教職概論アンケート」回収数

時期\区分	合計	1群	2群	3群	4群
授業開始前	252	84	32	104	32
授業終了後	235	79	29	96	31

項目：「所属」、「性別」、「学年」以外の項目（本稿関係分）を示す（表2）

表2 「教職概論アンケート」調査項目

1	この授業は、満足できるものであったか。 ①とても満足している ②大体満足している ③どちらとも言えない ④あまり満足していない ⑤全く満足していない
2	この授業で、教職に対する理解が深まったか。 ①はい ②いいえ ③どちらとも言えない
3	この授業で、教職の魅力ややりがい、使命等を感じられたか ①はい ②いいえ ③どちらとも言えない
4	この授業で、教職の仕事内容を理解できたか。 ①はい ②いいえ ③どちらとも言えない
5	この授業で、教職に就くために勉強する、取り組むべき課題が明確になったか。 ①はい ②いいえ ③どちらとも言えない
6	学校教員という仕事に対して、どんなイメージを持つか。（3つまで可） ①つらい仕事 ②やりがいのある仕事 ③楽しい仕事 ④つまらない仕事 ⑤楽な仕事 ⑥一生をかけられる仕事 ⑦身分の安定した仕事 ⑧その
7	あなたは将来、学校教員になりたいと思うか。 ①とてもそう思う ②そう思う ③どちらとも言えない ④あまりそう思わない ⑤まったくそう思わない
8	自分が学校教員に向いていると思うか。 ①大いにそう思う ②大体そう思う ③どちらとも言えない ④あまりそう思わない ⑤全くそう思わない

集計：前稿同様に、卒業要件、教員免許状取得等条件により区分した（表3）

表3 「教職概論アンケート」集計・整理区分

区分	課程（コース、選修）名（コース、選修名略）
1群	学校教育教員養成課程（教科教育・10選修）
2群	学校教育教員養成課程（国際理解教育、幼児教育、障害児教育）
3群	実践臨床教育課程（人間教育学、教育心理学）、健康科学教育課程（スポーツ健康科学、生活健康科学）、情報科学教育課程（表現情報処理、数理情報）、総合文化教育課程（国際文化、文芸・芸能）
4群	学校教育教員養成課程（小学校教育）

2. 結果と考察

2-1 授業後の「満足度、理解度、課題意識等」について

「教職概論」受講後の「満足度、理解度、課題意識等」について、項目1～5を集計し、各群別にグラフ化した。(図1～5)

図1は「授業の満足度」である。各群とも「とても満足」が50%～75%、「大体満足」を加えると92%～100%となった。特に2・4群は100%、1群で97%と高評価となった。「全く満足しない」、「あまり満足しない」とした者も1・3群で2%にとどまる。

図2は「教職に対する理解度」である。1群から99%、100%、96%、100%とこの項目でも高い理解度を示した。授業をとおして「教職」の全体像について凡そ理解できたと感じている姿が見える。

図3は「教職の魅力、やりがい、使命感の実感度」である。この項目でも「はい(感じた)」が94%以上となり2群では100%となった。「いいえ(感じなかった)」は1・3群で1%であったが、「どちらとも言えない(分からない)」が2群を除き3%～5%存在する。

前稿で示したように「教職を希望しない」者が1群から順に2%、0%、11%、0%いる。その中で図1～3に分かるように受講者全体としての「教職概論」への満足度や理解度は高く、入学当初の学習ニーズや大学授業に対する期待に込んでいると言えよう。

次に、「教職の仕事内容の理解」と「(今後の)課題意識」に

図4は「教職の仕事内容の理解」であるが、授業をとおして「はい(分かった)」とし

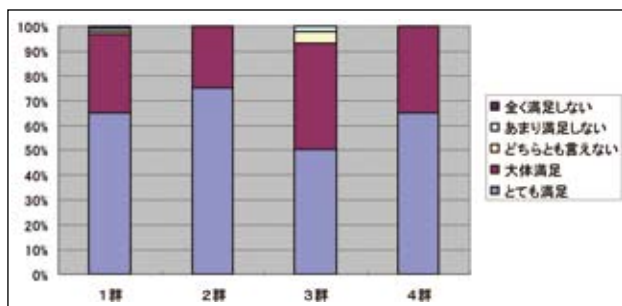


図1 項目1「授業の満足度」の各群別割合

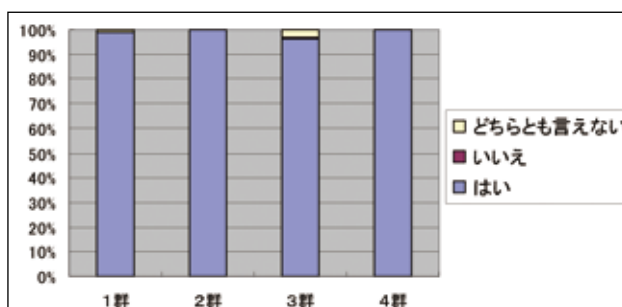


図2 項目2「教職の理解度」の各群別割合

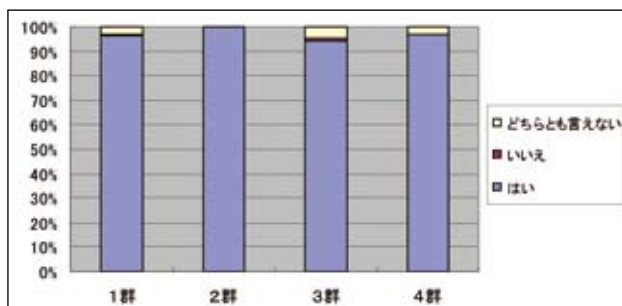


図3 項目3「教職の魅力等の実感度」の各群別割合

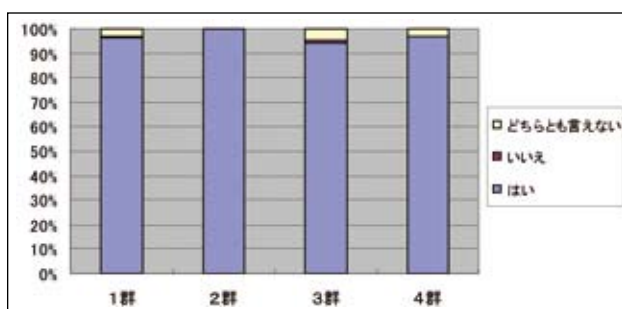


図4 項目4「仕事内容の理解」の各群別割合

ついて見るが、この2項目の回答も項目1～3同様にかなり類似する。

た者は4群で97%と高い評価を示したが、2群で90%、1・3群で80%強にとどまった。1・3群では「いいえ（分からなかった）」に「どちらとも言えない」を加えると20%近くとなり、今後の授業運営（全体構想、内容精選、人材活用や指導計画等）の工夫改善が必要であることを示している。

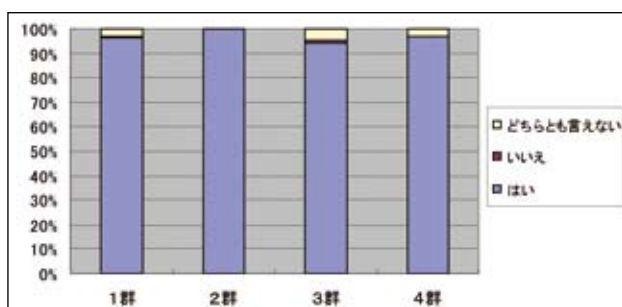


図5 項目5「今後の課題の明確化」の各群別割合

図5に「（今後の）学習や取組の課題が明確になったか」を示す。「はい」とした者は2・4群で97%であったが、1群で86%、3群で78%となった。逆に「いいえ」、「どちらとも言えない」を加えると14%～22%となり、授業をとおして今後の目標や課題意識を育ててきていないことが分かる。「教職の仕事内容の理解」の度合いが、以後の教育学部での学習や活動における目標や課題を明確に持てるか否かにつながると考えられ、授業運営の工夫や授業外、学外での学習や諸活動の拡充による理解が必要と思われる。

2-2 授業前後の「教職イメージ、教員希望の有無、適性評価の変化」について

ここでは、項目6～8について、「教職概論」の授業開始前と終了後の変化を比較する。大学入学以前（入学当初）の学生たちの教職に対するイメージや憧れの教員像は、あくまで「教えられる立場」から見たものである。しかし、今後、教職をめざす学生たちは、「教える立場」に変容、成長しながらめざす教員像や教職の具体的な姿をイメージしていかなくてはならない。

筆者らは、彼らが「教職概論」での学びをとおして、教育現場の実情や現代的課題を的確にとらえ、実態的に理解しながら、それでも苦難や厳しさを乗り越えて、教職をめざし教職キャリアを形成しようとする歩みを進めて欲しいと願う。そのためにも「教職概論」受講前後の「変化」を重要視するものである。

図6は「教員の仕事に対するイメージの変化」を各群別に見たものである。さらに、図

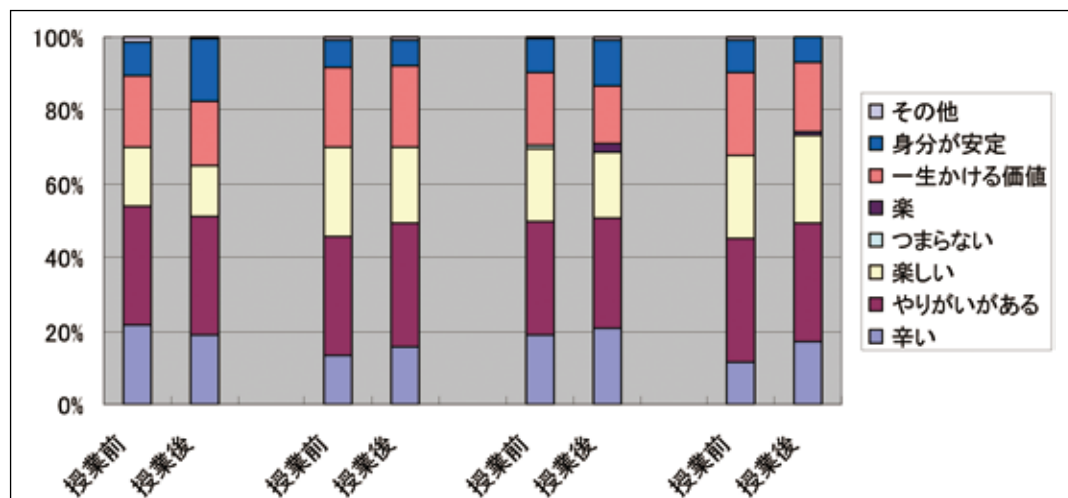


図6 項目6「教員の仕事に対するイメージの変化」の各群別割合（左から1群～4群）

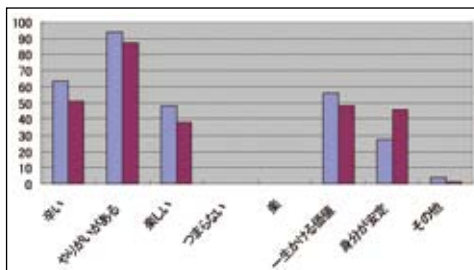


図7 「イメージの変化（1群）」

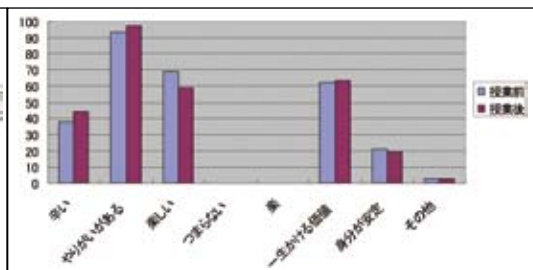


図8 「イメージの変化（2群）」

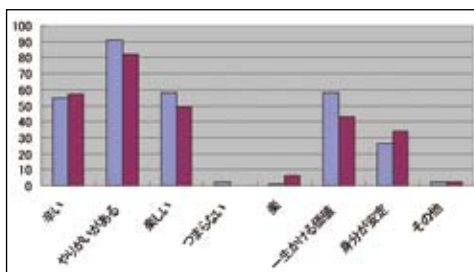


図9 「イメージの変化（3群）」

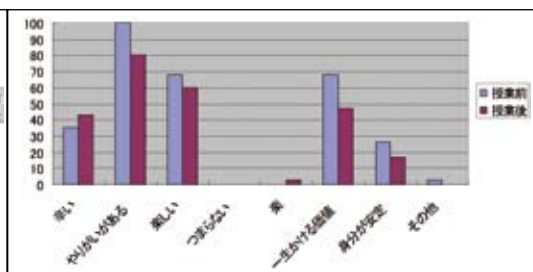


図10 「イメージの変化（4群）」

7～10に各群別の変化を示す。

受講前の「教員の仕事に対するイメージ」は1群と2・3・4群で分かれる。1群では「やりがいのある仕事」、「一生かける価値がある仕事」、「楽しい仕事」が多い反面、2番目の上位項目に「辛い仕事」が入り、教職の厳しさや学校現場の悲観的状況等を意識している様子が伺われる。前稿中の「本学部の志望理由、動機」においても、第1位項目「学校教員希望」、第2位項目「教育学部自体を希望」が圧倒しているように、学校教育の現状や教員の仕事状況等について既に一定の認識があると思われる。他の3群は「やりがいのある仕事」に次いで「楽しい仕事」、「一生かける価値がある仕事」となり、子どもと関わる楽しさ、教職の魅力、意義や使命感等を「楽しさ」や「喜び」としてイメージして入学していることが伺われる。

しかし、受講後は各群ともに、教育現場の実情や教職の厳しさを理解する中での「変化」が見られる。各群ともに「やりがいのある仕事」、「楽しい仕事」が減少し、入学当初から高い割合を示した1群を除き「辛い仕事」が増加する。入学前の教職や学校現場等に関する知識、印象や肯定的側面の理解が、「教職概論」をとおして実態的理解に進む中で変化していると考えられる。また、1・3群では多くの項目が減少する中、「身分が安定した仕事」が増加し、生活のための職業として教職を見る意識が見える。

2群は「楽しい仕事」が減少し「辛い仕事」が微増しているが、「やりがいのある仕事」、「一生かける価値がある仕事」が増加していることに注目する。この2項目について他の群が全て減少する中、授業や座談会等で学校や子どもの実情を学び、教職の厳しさを感じながらも教職に対するイメージを高めている様子が分かる。前稿でも「早い時期から志望・受験を決定」する傾向が見られたが、授業が教職や様々な教育課題に対する肯定的な評価や姿勢につながっていると見られる。

次に、図11に「学校教員希望の有無の変化」を、図12で「学校教員の適性への自己評価の変化」を各群別に見る。図6以降に見られるように、「教職概論」での学びが自己の教員としての適性判断につながり、教職志望者の割合も変化すると予想できる。

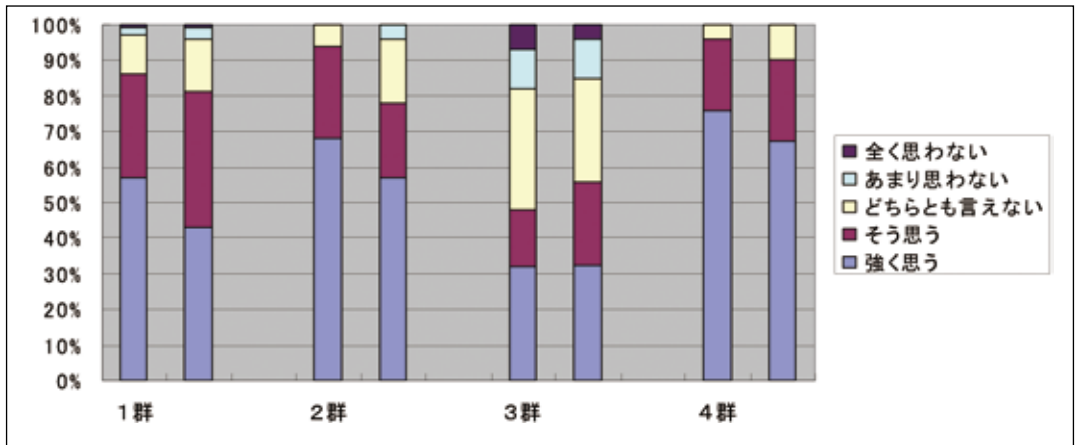


図11 「学校教員希望の有無の変化」

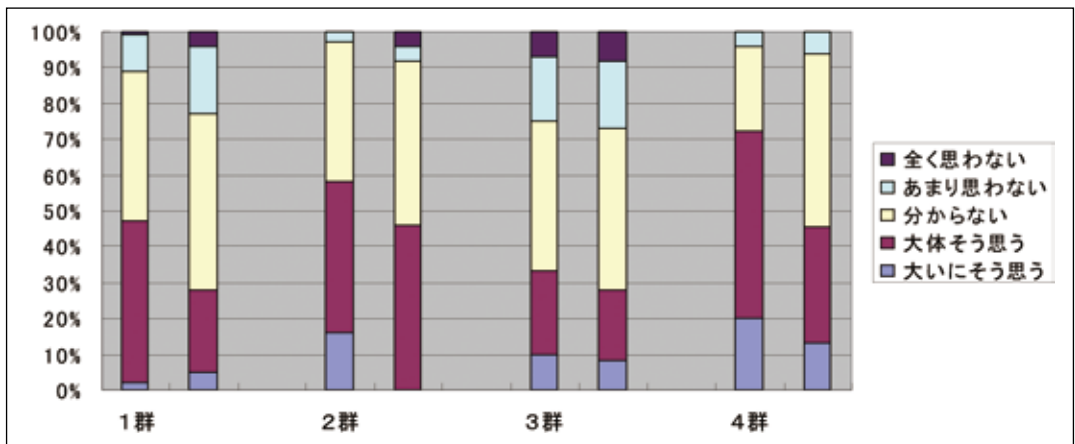


図12 「学校教員の適性への自己評価の変化」

図11「学校教員希望の有無の変化」に見られるように、授業後は、1・2・4群で「強く思う（希望する）」が10%程度減少したが、「そう思う」までで78%を、「分からない」までで96%を越え、依然高い割合で推移している。ただし、2種類の教員免許状（小・中）取得を卒業要件とする1群や小学校教員に特化したカリキュラムを有する4群で、「全く思わない」、「あまり思わない」、「どちらとも言えない」が増加することは、学生のキャリア形成に否定的な影響を与える可能性が高いことから、キャリア教育や就業力育成に向けた内容を加える等の工夫改善が必要と思われる。3群では教員希望の割合が増加する傾向にある。毎年、「センター試験の結果」をもとに志望・受験を決定する者が60%を越え、入学当初は教員希望者が半数に満たない傾向にあるが、「教職概論」の受講や教職をめざす学生とともに学ぶ中で、教職志望者が増えている。

図12では「学校教員の適性への自己評価の変化」を見た。授業をとおして、自らの「教員としての資質能力」を見つめ、専門的知識や教職体験のほとんど無い状態での「教職に対する不安」等から、各群ともに肯定的評価が減少していることは当然と考える。また、各群ともに「わからない」が最多であることや否定的評価が増加することは健全とも言えるが、学生との関わりの中で、「全く思わない」、「あまり思わない」とした者の中には、

教員に対する一面的、固定的なイメージを持ち、外れた者は教員には向かない、なれないと考える学生がいることも理解した。特に学校教育は、教職員がチームを組み、様々な個性、違いやよさを持ち、それぞれなりに成長しようとする子どもたちに、個性豊かで多様な教員がそれぞれのよさを生かしながら、チームとして対することが必要である。一人一人を大切にすること、連帯感のある集団を形成すること等について、講義、演習や班活動等の中に取り込んでいくことが必要と思われる。

2-3 「教職概論」の授業内容、形態と学生の自己評価について

前項までは、「教職概論」の満足度、理解度や受講前後の学生の変化について、各群ごとに整理した。本項では、15コマからなる「教職概論」各回の学生による自己評価をもとに、授業内容、形態や学びの「満足度」について報告する。

2-3-1 「教職概論」の授業内容、形態と「自己評価カード」について

ここで「教職概論」の目標、授業内容等を示す。

(1) 平成22年度「教職概論」の目標

- ①教職をめざす学生に、教職の魅力、やりがいや使命感等を理解させることをとおして、教職への情熱や志向性、今後の学びに対する意欲を育む。
- ②教職をめざす学生に、本学部の教員養成カリキュラムを理解させることをとおして、様々な学びや活動に積極的に取り組もうとする態度を育てる。
- ③教職をめざす学生に、教職や学校教育等についての基礎的知識、技能等を学ばせることをとおして、教員としての見方考え方や指導方法等について理解させる。

(2) 平成22年度「教職概論」の内容（概要）と学習形態等

- ①第1回 「オリエンテーション」
学部長指導講話、授業ガイダンス、「教職概論アンケート」 【講義】
- ②第2回 「教職・学校現場を知る①（学校、教育制度、教職）」
講義「児童生徒から学生へ、学生から教員へ」 【講義】 【演習】
- ③第3回 「教職・学校現場を知る②（学習指導、授業づくり）」
講義「教えられる人から、教える人になる」 【講義】
- ④第4回 「教職・学校現場を知る③（生徒指導、人間関係づくり）」
講義「伸ばされる人から、伸ばす人になる」 【講義】 【演習】
- ⑤第5回 「教職・学校現場を知る④（学校管理、運営）」
講義「守られる人から、守る人になる」 【講義】 【演習】
- ⑥第6回 「先生方との座談会に向けて①」
説明「座談会オリエンテーション」 【講義】
活動「班別活動（アイスブレイキング、グループ編成等）」 【班別協議】
- ⑦第7回 「先生方との座談会に向けて②」
活動「班別活動（座談会のテーマや質問事項等）」 【班別協議】
- ⑧第8回 「先生方との座談会①」
活動「教職の魅力、生きがい、仕事や課題等について」 【講義、協議】
- ⑨第9回 「先生方との座談会②」
活動「教職の魅力、生きがい、仕事や課題等について」 【講義、協議】

- ⑩第10回 「先生方との座談会を終えて①」
活動「班別活動（プレゼンテーションに向けて）」 【班別協議】
- ⑪第11回 「先生方との座談会を終えて②」
活動「プレゼンテーション（座談会で学んだこと）」 【発表】
- ⑫第12回 「教育実習を知る」
講義「教育実習の意義と仕組み（教育実習部長）」 【講義】
活動「班別活動（教育実習を終えた先輩と語る）」 【班別協議】
- ⑬第13回 「教育ボランティア、自主的な学びの場を知る」
講義「ちやぶ台プログラムや教育ボランティアでの学び（教員）」 【講義】
活動「班別活動（活動に参加している先輩と語る）」 【班別協議】
- ⑭第14回 「教職キャリアの形成に向けて」
講義「教職キャリア形成と大学時代に取り組みたいこと」 【講義】
活動「学びのロードマップづくり」 【演習】
- ⑮第15回 「授業のまとめ」
調査「教職概論アンケート」「授業評価」、レポート作成 【講義】

(4)平成22年度「教職概論」の「自己評価カード（自己評価・学習整理カード）」

毎時間後、学習内容の整理、振り返り、質問・要望事項の把握等を目的として、「自己評価カード」を提出させている。その中に「教職概論」の目標を項目化した「学習の自己評価（4段階）」があり、授業後、「1 授業や学習内容の理解」、「2 関心・意欲、態度」、「3 教職等キャリア形成に向けた課題意識」を最上位4点で集計している。

学生には授業等を振り返り、以後の学習を充実深化させる手段とするよう指導しているが、指導する側にとっては、その授業各回ごとに授業・活動内容や形態が異なることから、その違いにより、学生の理解面、情意面と以降につながる志向性を評価し、指導の改善に資することを目的としている。

なお、「⑪第11回 プレゼンテーション」は発表する班に対する感想や意見を書かせる評価表としたこと、また「⑮第15回 授業のまとめ」は課題レポートとして実施したことから、観点別評価を実施していない。特に「⑪第11回 プレゼンテーション」については評価が必要であり、来年度以降実施したい

「教職概論」自己評価・学習整理カード		【教職ポートフォリオシート：概論①】	
授業日	2010年 4 月 15 日(木曜日)	氏名	
コース・選修名		学年	備考
【学習の自己評価】本日の授業への取り組みについて、該当する数字を記入してください。			
4 十分にできた 3 ほぼできた 2 あまりできなかった 1 全くできなかった			
1 本日の授業や学習の内容が理解できたか			
2 興味をもって授業を聞いたり、活動に参加したりできたか			
3 教職や様々なキャリアをめざす意識、方向や課題等を実感できたか			
【学習の振り返り】本日の授業について、①～③に感想等を書いてください。			
① 興味や関心をもった内容、学んだ内容とそう感じる理由等を、2つ書いてください。			

図13 「自己評価カードと観点等」

2-3-2 「教職概論」の授業内容、形態と学生の学びについて

図14は各回の観点合計ポイントを群別に見たものである。

総合して見ると、第4回(11.3) 第8・9回(11.2)、第5回(11.0)、第14回(10.8)、

第7回（10.7）が高い数値を示している。第4回、第5回は「教職・学校現場を知るシリーズ」で生徒指導、学校管理等の講義が中心であったが、両回ともに学生の個人ワーク、隣や周囲のグループでの意見交換等演習形式が多く取り入れられた。第8・9回は学校現場から現職教員を招聘しての座談会で、活発な話し合いが展開されたことやそれまでの各グループ協議の成果を発表する場であったこと等が数字に現れていると考えられる。第14回は客員教員による「教職キャリア形成」に関する講義と演習が盛り込まれたこと、第7回は各グループでの自主活動の中で参画意識が高まったのであろう。

逆に、第3回、第12回が10.5前後となった。第2回は学習指導に関する一斉講義であったこと、第12回は教育実習について教員や上級生から説明を受ける形であり、まだ先のことという意識や受け身の授業形態であったこと等が要因と考える。

群別には、ほとんどの回で2群が10.9と高い評価点をつけ、4群が10.5、1・3群が10.3となっている。1群は回を追うごとに数値が高まり班別活動を経て座談会にピークが来ている。教職キャリア形成に関する回も高評価であった。逆に座談会後の班別活動や教育実習、教職ボランティアに関する回の評価が低かった。2群は各回の合計点が高く、前稿で示した目標や課題意識の高さを示す形となったが、座談会後の班別活動と教育実習に関して低い評価となった。3群は座談会、生徒指導、学校管理や他群が低い傾向を示す座談会後の班別活動や教育実習等について評価を上げており、学校教育、教職や教育実習についての興味関心

や不安の高さを示したとも考えられる。4群は各回を通じて高い評価となっているが、他群に比べて前半の班別活動や座談会での評価が低い。後半の班別活動では高評価となっていることから、座談会まで

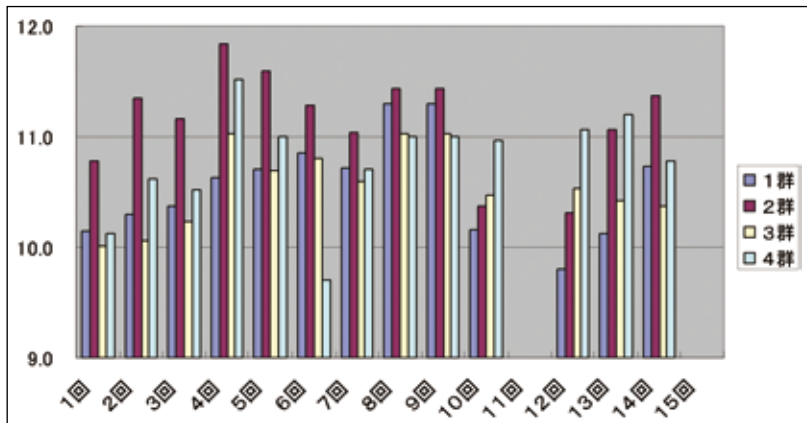


図14 「各回の観点合計ポイント（群別）」

では他学生との現状認識や課題意識の違い、戸惑いが出ていたとも思われる。

次に、「自己評価カード」の観点別に、各回各群を見る。

図15は「1 授業や学習内容の理解」、図16は「2 関心・意欲、態度」、図17は「3 教職等キャリア形成に向けた課題意識について、他群との比較を見やすくするために折れ線で示したものである。

図15では、やはり座談会での現職教員との協議や生徒指導、学校管理等に

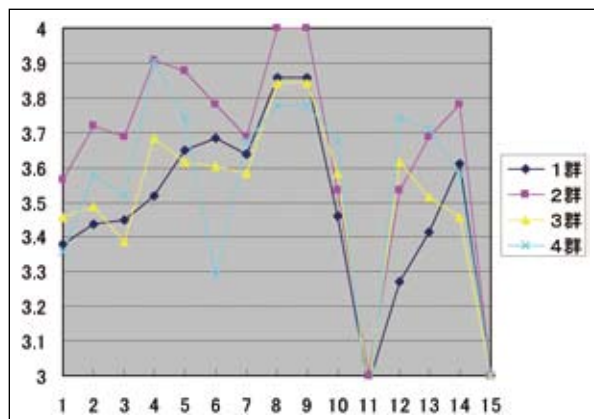


図15 「理解面の各回比較（群別）」

かかる具体的な事例紹介等が高評価、班別活動や教育実習のように学校現場との関わりの薄い回では低評価となっている。学生の理解の対象が、子どもや学校、教員の現状や課題等に向いているとともに、教員の指導やそれによる子どもの変化等について具体的に学んだと感じるときに「理解が深まる」と感じていることが見える。

図16では、座談会と座談会前後の班別活動の評価が高くない。自分の興味関心や考えを有する中で、他者から話を聞く、集団に積極的に参画する等の学習や活動の消極的な傾向が有ることも考えられる。

図17でも、座談会や実践事例に基づいた講義演習の回が高評価である。特に座談会は各群ともに高く、現職教員から今後の学びについて具体的な助言が得られることも要因としてあろう。

1・3群群は現職教員との交流、教職キャリア形成を意識した学習、実践事例等による現場理解等の導入が効果的であろう。2群は各観点ともに満足度が高く、座談会での現職教員との交流、子どもや教育活動の具体に基づいた学習を求めていると思われる。4群は実践的な現場理解や教育実習、教育ボランティアといった学外での教育実践に興味関心が高いことが見える。

おわりに

筆者らは、教職スタート科目である「教職概論」について、①本学部における教員養成カリキュラムのスタート科目、教職入門科目。②本学部における教員養成カリキュラムについて正しく理解させる科目。③教職、学校教育や教職キャリア形成にかかる基礎的知識等について理解させる科目。と位置づけている。

今回、前稿「教職スタート科目『教職概論』の調査から（Ⅰ）」による学生群の4区分に基づく「教職概論」受講による変化や各回の学びにおける満足度の違いを整理した。それらは、何より現在の「教職概論」に授業改善の手を加えることをとおして、次代を担う教員や教育的視点を持って社会に貢献しようとする学生たちのキャリア形成を支援しようとする一歩に過ぎない。

現在、各地で教職スタート科目の授業改善が行われている。鹿児島大学では「教職基礎研究」について生徒の視点から教師の視点へ、教職に就くまでの過程を学生自身に明確

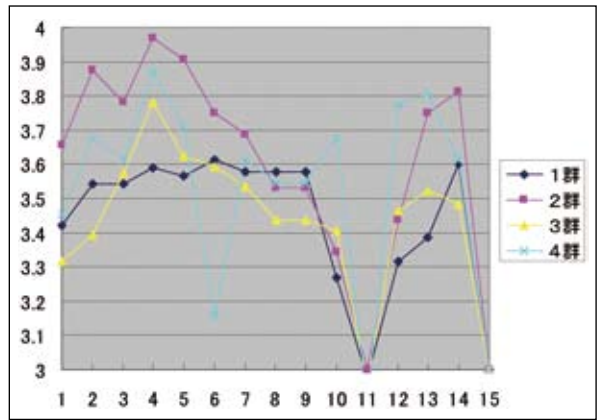


図16 「情意面の各回比較 (群別)」

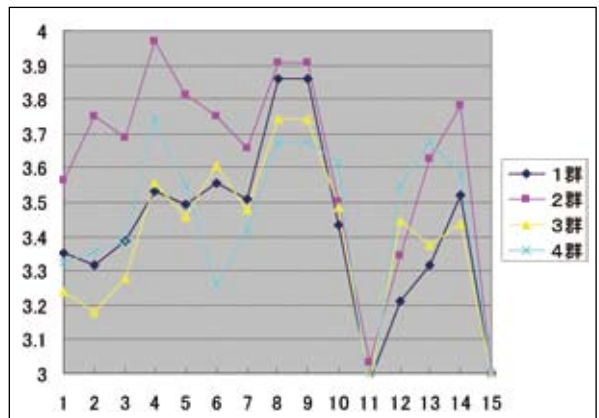


図17 「志向性の各回比較 (群別)」

に設計させることをめざし、P D C Aサイクルによる継続的な授業改善を進めている¹⁾。愛媛大学では、理論と実践の往還を重視したカリキュラム体系の明確化と「小学校の教科に関する科目の導入科目を実施されている²⁾

今後は、学生や学生集団の「違い」を生かし、学びの満足度を高め、「教職概論」が位置づけにふさわしい教職スタート科目となるよう改善を具体的に進める所存である。

謝辞

本研究にあたっては、「教職概論」に講師として招聘した公立・附属学校（園）教員や、教育学部の多くの方々のご指導ご支援をいただいた。ここに厚く謝意を伝えるものである。

引用・参考文献

- 1) 鹿児島大学教育学部「平成20年度教員養成シンポジウム～実践力を高める教員養成の在り方～報告書-5P」（2010. 2. 28）
- 2) 愛媛大学教育学部山崎哲司他「実践力向上を目指したカリキュラムの始動（その1）～カリキュラムの体系化と『初等教科概論』～」 （「日本教育大学協会研究集会2006」2006. 10. 14）を参考にした。